

山口地学会の未来図

40代の声

山口大学大学院創成科学研究科 川村喜一郎

私は、東京から、ここに赴任して2016年4月で、早5年目になる。私は、山口県という土地はおろか、大阪より先の新幹線に乗ったことがほとんどなかった人で、山口県に関してもほとんど知らなかった。しかし、この4年間に、県内だけでなく、中国地方、九州、四国とさまざま巡った。

赴任してすぐに、学部の広報業務に従事し、日本地質学会の支部事務局を執り行い、それらに関連することも相まって、一人でだったり、家族とだったり、学生とだったり、地球科学と関連する場所に行く機会がかなりあった。ある日突然、「がまだすドームまで来てください」と言われたが結局勘違いで来る必要が無かったりと、トラブルがままあったが、しょうがないな、と思いつつ、その場所その場所の地球科学を探して見た。

以前の職場でも身近な地球科学を探していた。職場は、東京の六義園（りくぎえん）という柳沢吉保の大名庭園の近くにあり、その中には多くの庭石があった。庭石は、その後の所有者の岩崎弥太郎によってさらに追加された。全国の石がたくさん設置されており、見ようによっては、都心で気軽にふれあうことができる地球科学なのだろうか、と思い、大名庭園銘石ガイドを職場の理事長だった佐藤正さんと一緒に作った。山口周辺にも発想を変えると身近な地球科学がまだまだ眠っているな、と大学周辺を散策しながら過ごしている。

その佐藤正さんには、日々、さまざまな本を紹介してもらっていた。特に、これはおもしろい、と思ったものが『日本その日その日』というエドワード・モースの書籍であった。モースは、シャミセンガイを追って明治初期の日本に来て、その日に大森貝塚を発見した人として有名である。その後、彼は東京大学に赴任、江ノ島の漁師小屋を臨界実験所に改装し、研究に従事した。日本各地に講演会に行ったり、試料の採取旅行に出かけたりした。そのときの逸話を書籍にしたものが、『日本その日その日』である。そのすべての描写がおもしろいのである。文章で情景が描けるところがよい。一説を紹介する。「……我々は切符を買った。長さ七インチ、幅二インチ半、厚さ半インチの木片で漢字がいくつか印刷してある。興行場は棒を立て、たるきを横に渡した場所に、天井に蓆（むしろ）を使用し、壁もまた蓆でできていた。粗末な棧敷（さじき）、というよりもむしろ棧敷二列がこの建物の周囲をめぐっているのだが、これもまた原始的なものであった。その中心に柱が四本立っていて、その間は高くなっており、直径二十フィートもあるかと思われる円場（どひょう）が上に赤い布の天蓋

をもって乗っている。柱の一本ずつに老人が一人ずつ座っているのは、何か審判官みたいなものであるらしい。また厳格な顔をして、派手な着物を着た男がアンパイアの役をする。巨大な肥えた相撲取りが円場にあらわれ、脚をふんばり、まるで試験をするように両足を上下したり、力いっぱいひっぱたいたりした後、さて用意ができると顔つきあわせて数分間うずくまり、お互いに相手の筋肉を検査する。……いよいよ準備が出来ると二人は両手を土につけ、そこで突然飛びかかる……（日本その日その日1より）。

ありありと光景を描くことができる文章——記載的な文体——とはおもしろいな、と思った。またこの文章の上にはモースの手書きのイラストがあり、その情景をより浮き立たせる。相撲の細かい描写まで文章にしていることに感銘を受けた。

私はモースのように流れるような文章を書くことはできないのだが、地球科学にちなんだ場所を訪れたときは、せめて記録を残しておこうと努力はしている。写真だけでなく、モースのようにスケッチをしたり、メモをとったりと。そして、年を経る毎に記録を積み重ね、ゆくゆくは山口地学会へ寄稿してみたいと思う。そういった一人一人の思いが「会」を支えるのだろうなと思っている。